

- 442 『奇書』、北野博美、『性之研究』 139
- 443 藤澤衛彦『絵入日本艶書考』と『日本伝説研究』 142
- 444 佐々木指月『変態魔術考』とアメリカ 145
- 445 竹内道之助、風俗資料刊行会、三笠書房 148
- 446 仏蘭西書院と谷書店 151
- 447 荒城季夫と太田三郎 154
- 448 原比露志『寢室の美学』 157
- 449 中城ふみ子『乳房喪失』、作品社、岩田貞夫 160
- 450 第一出版社の『人間探究』 163
- 451 武野藤介と『武野藤介風流文学自選集』 166
- 452 鷹野弥三郎『山窩の生活』と鷹野つぎ 169
- 453 馬込文士村、田中直樹、チップ・トップ書店 173
- 454 文学界社発行『文学界』 176
- 455 知的協力会議『近代の超克』と創元社 179
- 456 北尾鎌之助「近畿景観」シリーズと『新近畿行脚』 183
- 457 小林秀雄と創元選書 186
- 458 創元文庫とブルーノ・タウト『忘れられた日本』 190
- 459 明治書房、版画荘、石川淳『白描』 193
- 460 三笠書房『現代小説選集』と『現代長篇小説全集』 196
- 461 坂口安吾『日本文化私観』と文休社 199
- 462 日産書房と小林秀雄『文芸評論』 202
- 463 井上友一郎のモデル小説『絶壁』 205
- 464 井上友一郎、野田誠三、野田書房 208

476	岡戸武平『続・筆だこ』	247			
475	尾崎千代野編『尾崎久彌小説集』	243			
474	石井鶴三『宮本武蔵』挿絵集』と 『大菩薩峠』	240			
473	小村雪岱と邦枝完二『お伝地獄』	237			
472	小村雪岱と新小説社 異』と諸星大二郎	234	231		
471	修道社版 柴田天馬訳『定本聊齋志 異』と諸星大二郎	227			
470	田宮虎彦、千代『愛のかたみ』と平 野謙	224	220		
469	田宮虎彦と『文明』 党』、久保田正文『花火』	217			
468	八雲書店、石川達三『ろまんの残 党』、久保田正文『花火』	214			
467	新田潤『わが青春の仲間たち』と 『妻の行方』	211			
466	東京文芸社の富田常雄『春の潮』	208			
465	青山虎之助、『新生』、『茉莉花』	205			
487	乾信一郎『新青年』の頃』、『文学建 設』、『新編現代日本文学全集』	253	250		
478	実録文学研究会、満月会、国防文芸 連盟	248			
479	プロレタリア大衆文学と貴司山治 『ゴー・ストップ』	243			
480	昭和十年代の流行作家竹田敏彦と 『涙の責任』	238			
481	撰津茂和と林二九太	233			
482	中野実『東京無宿』	228			
483	村雨退二郎『明治巖窟王』と国民文 学	223			
484	小学館『現代ユウモア全集』	218			
485	佐々木邦のユーモア小説の行方	213			
486	『サンデー毎日』と『大衆文学』	208			
487	川端克二『海の魂』とコンラッド 『陰影線』	203			

488	江馬修『山の民』と出版事情	286	503	大正一切経刊行会『大正新修大蔵経 総目録』	336
489	江馬三枝子『日本の女性』	289			
490	小山勝清『それからの武蔵』	292	504	高楠順次郎とマックス・ミュラー	340
491	東都書房、『忍法小説全集』、『日本推 理小説大系』	295	505	高楠正男と大雄閣	343
492	五味康祐と斎藤十一	299	506	『国訳一切経』と大東出版社	346
493	横川亮一と集英社『新日本文学全集』	303	507	木村鷹太郎と『バイロン傑作集』	349
494	南條範夫『駿河御前試合』と山口貴 由『シグルイ』	306	508	鈴木大拙と大東出版社版『日本的靈 性』	352
495	人物往来社『考証江戸事典』	309	509	東方書院『昭和新纂国訳大蔵経』	355
496	堤糸風と『講談全集』	313	510	渡辺海旭と相馬黒光『黙移』	359
497	講談社と『少年倶楽部』	316	511	実業之日本社『岡田式静坐法』と大 田黒重五郎	362
498	南洋一郎と『怪盗ルパン全集』	319	512	光融館と南条文雄『梵文阿彌陀経』	365
499	池田宜政と『修養全集』	323	513	島地黙雷『維摩経』	368
500	保篠龍緒と星野辰男	326	514	マックス・ミュラー『言語学』と『比 較宗教学』	371
501	世界文庫刊行会と『世界国民読本』	330	515	マックス・ミュラー『宗教学綱要』	375
502	『興亡史論』とナポレオン三世	333			

516	マックス・ミュラーの小説『愛は永遠に』	378	527	洛陽堂と山崎延吉『農村教育論』	416
517	今岡十一郎『ツラン民族圏』と『ハングリー語辞典（洪和）』	381	528	山崎延吉『農村之経営』と裳華房	420
518	金沢庄三郎『日鮮同祖論』	385	529	洛陽堂、帆足理一郎『哲理と人生』、新生堂	423
519	後藤朝太郎『文字の史的研究』	388	530	『日本キリスト教出版史夜話』、長崎書店、小川正子『小島の春』	427
520	蘆田伊人と『大日本地誌大系』	392	531	新渡戸稲造『武士道』と桜井鷗村	430
521	吉本隆明、武井昭夫『文学者の戦争責任』と淡路書房	395	532	丁未出版社と桜井忠温『肉弾』	434
522	未来社『金日成著作集』と雄山閣	398	533	桜井鷗村と文武堂	437
523	田村栄太郎と雄山閣『生活史叢書』	401	534	押川春浪、武俠世界社、興文社	441
524	尾上八郎『平安朝時代の草仮名の研究』と自費出版	406	535	カーライル、土井晩翠訳『鬼臭先生衣裳哲学』	445
525	南条文雄『忘己録』と井冽堂	409	536	ヴェブレン『有閑階級論』と『特権階級論』	449
526	田中英夫『洛陽堂河本龜之助小伝』、中山三郎、小川菊松『出版興亡五十年』	452	537	高島素之訳『資本論』	452
			538	高島素之訳『マルクス十二講』と新	452

549	イブセン『海の夫人』と『近代劇大年』	488	560	ルナン、綱島梁川、安倍能成訳『耶蘇伝』	530
548	博文館の作家たちと加能作次郎「厄		559	柳田国男『石神問答』	527
547	生田蝶介『歩み』	484	558	井上哲次郎『釈迦牟尼伝』と文明堂	523
546	相馬御風『郷土文学読本』	481	557	『大正文学全集』を夢見る	518
545	田中貢太郎と『日本怪談全集』	478	556	厨川白村『近代文学十講』	514
	社	475	555	宮島新三郎『改訂大正文学十四講』	511
544	三上於菟吉『随筆わが漂泊』と元泉		554	博文館の鉄道書と旅行書	508
543	人間社と『親鸞全集』	472	553	瀧太郎『第四貝殻追放』	505
	と文献書院	469		春陽堂『鏡花全集』、雪俗文字、水上	
542	片山孤村『現代の独逸文化及文芸』			郎	
541	水守亀之助と人文会出版部	465	552	春陽堂『日本戯曲全集』と渥美清太	502
	『蒼ざめたる馬』	462		一	
540	冬夏社とロープシン、青野季吉訳		551	国民図書『現代戯曲全集』と仲木貞	499
	『美と崇高』	459	550	近代社『世界戯曲全集』	495
539	エドモンド・バアク、村山勇三訳			系	492
	潮社	456			

- 561 ルナン『幼年時代青年時代の思ひ出』、創元社、大和幻住
- 562 ニコル著、柏井園訳『基督伝』と警醒社
- 563 リシャル著、大川周明訳『永遠の智慧』
- 564 大川周明、井筒俊彦、東亜経済調査局
- 565 大川周明『安楽の門』、『古蘭』、岩崎徹太
- 566 若林半『回教世界と日本』、榎本桃太郎、イブラヒム
- 567 田中逸平『白雲遊記』
- 568 イブラヒム『ジャポニヤ』
- 569 大日本文明協会叢書『土耳其帝国』
- 570 嶋野三郎と『露和辞典』
- 571 衛藤利夫『韃靼』と翻訳書
- 572 クリスティー『奉天三十年』と岩波新書
- 573 鈴木剛『メッカ巡礼記』と田澤拓也『ムスリム・ニッポン』
- 574 地平社、『民俗芸術』、早川孝太郎『花祭』
- 575 レンギル『ダニユープ』、埴谷雄高、山本夏彦
- 576 笠間杲雄『沙漠の国』
- 577 回教圏研究所編『概観回教圏』
- 578 生活社、『東亜問題』、『東亜研究叢書』
- 579 グラネ『支那人の宗教』と津田逸夫
- 580 柘植秀臣『東亜研究所と私』と『東亜研究叢書』
- 581 東京政治経済研究所『一九二〇—三〇政治経済年鑑』
- 564 561 558 555 552 549 546 543 539 536 533
- 599 595 592 588 584 581 578 574 571 568

582	日本評論社と『新独逸国家大系』	602	原葆見	637
583	ハウスホーファー「地政学的基底」と『日本』	606	昭和研究会著『労働新体制研究』	641
584	太平洋協会編「南太平洋叢書」と泉靖一、鈴木誠共著『西ニューギニアの民族』	609	伊藤書店、石母田正「中世的世界の形成」、小山弘健他『日本産業機構研究』	644
585	太平洋協会編「太平洋図書館」と六興出版部	613	伊藤書店「青年群書」、赤木健介『読書案内』、古在由重『戦中日記』	648
586	エドモンド・ウィルソン『金髪のプリンセス』	616	唯物論研究会と式場隆三郎『サド侯爵夫人』	652
587	矢内原忠雄『南洋群島の研究』	620	健文社とロレンス『恋愛論』『チャタレイ夫人の恋人』	655
588	茅原茂と日本評論社前史	624	伊藤整『ロレンス篇』、『世界文豪読本全集』、春山行夫	658
589	長守善『ナチス経済建設』	628	小山書店版『チャタレイ夫人の恋人』と「チャタレイ裁判」	661
590	慶応書房と加田哲二『戦争本質論』	631		
591	岩崎徹太と木曜会	634		
592	菊地春雄『ナチス戦時経済体制研究』、東洋書館「労務管理全書」、桐	665	『唯物論研究』と福田久道	665
593				
594				
595				
596				
597				
598				
599				
600				

人名索引

689

あとがき

669

近代出版史探索Ⅲ

401 北原白秋「銀座の雨」と沙良峯夫「銀座青年の歌」

『近代出版史探索Ⅱ』397に続いて、銀座の流行歌にもう一度ふれてみる。安藤更生は同350の『銀座細見』の中で、「かつての銀座を指導したものは、フランス趣味であり、芸術青年であつた」が、それらはまったく後退し、「今日銀座を横行するものは、モダンボーイであり、アメリカニズムである」と述べている。そして安藤はその例として、銀座を主題とする二つの詩を引用し、「両時代の気風の差異」を見ようとする。

そのひとつは北原白秋の『東京景物詩及其他』（東雲堂書店、大正二年）所収の「銀座の雨」で、近代文学館とほるぷ出版の復刻版を見ると、明治四十四年作とある。「雨……雨……雨……／雨は銀座に新らしく／しみじみとふる、さくさくと、」に始まるこの詩は「わかいロテイのものおもひ」「お菊夫人の縫針」とか（フレイドレニエ）「Henri De Régnier が曇り玉」（ヴェルタネ）「Vertane の涙雨」とかいった言葉が鏤められ、確かに安藤のいう銀座における「フランス趣味」と「芸術青年」の投影を示している。

また「余言」に白秋の「東京、東京、その名の何すればしかく哀しく美しく美くしきや」との告白が見えてくるように、東京や銀座に対するオマージュも含んでいるのである。白秋自らによる装丁と木下杢太郎のカラー挿画「夏の遊楽」はその表象といえよう。なおその版元については拙稿「西村陽吉と東雲堂書店」（『古本探究』所収）を参照されたい。

この白秋の「銀座の雨」に対して、安藤は次に沙良峯夫の「銀座青年の歌」を挙げている。沙良は年

少にして亡くなった詩人で、この詩は大正十四年の作であり、最近出版された彼の多からぬ遺稿の一編だという。沙良という詩人の名前も、「銀座青年の歌」なる詩も『銀座細見』の中でしか紹介されていないのかもしれない。ただ六ページに及ぶ長い詩なので、抽出して示すしかない。

なにしろ冬が逝つたのさ、

あの化粧品屋の売つ子め、

たうと女優になりやがった。

―しかも活動の。

大雪の夜に濠端を

一緒にタクシではしつた事を

忘れたいのに覚えてゐるが、

くそ、まあせいぜい俗衆の前で

下手なキスでもして暮し給へ。

(中略)

春は細身のケエンにかぎる。

やはらかな色のボルサリノ、

英吉利型イギリスのオリイブいでたちの春の上衣の出立で、

ケエン振りふり街を歩いたら、

さぞや好からう、恋もある。

ごつた返しのバラツク街に

浮気な春が、春がくる、

ほこり、砂嵐、なんのその、

空はうつとり、董いろ、

稽古^{チヨコレット}律塗の飛行機よ、

ひとつ陽気にきり、舞して、落つこちろ。

ラアララアラ、ランラアラ……

一部分の引用でしかないが、同じ銀座がテーマであっても、沙良の詩の、白秋と異なるニュアンスとリズムは理解頂けたと思う。安藤の指摘によれば、この詩に現われてくる人名の多くがアメリカの映画人で、沙良は「今日見る如きアメリカカカブレの青年ではない」けれど、そこで多少の憧憬をこめて歌われているのは「悉くアメリカの生活の縮図」で、「その作品には思はずも時代嗜好の方向を見せて居る」ということになる。

このふたつの詩に表象されている銀座の変貌は何に起因しているのか。もちろん「ごつた返しのバラツク街」に象徴されている関東大震災の投影であるのだが、安藤はそこに何よりも第一次世界大戦後のアメリカの台頭を挙げ、次のように述べている。

「今やアメリカである。成金国アメリカで起つた百パーセントの資本主義である。今や世界がアメリカなのか、アメリカが世界なのか。高度に発達した機械主義によるマツス・アンドスピード・プロダクション・テイラリズムの適用に仍る能率主義産業の合理化、アメリカはその計る可からざる資力を擁し

て先づ戦後の疲弊回復せざるヨーロッパを征服し、更に全世界を征服した。マンモンは今や世界に光宅してゐるのである。今やアメリカだけが世界なのである。」

それに対し、ヨーロッパは「完全に田舎」となり、「最早文化的衰退期」に入つてしまつた。銀座も銀座もヨーロッパ文化の模倣と影響下に成立し、銀座文化も「これら西欧諸国の半強制的な模倣だつた」ところがその範としたヨーロッパが没落し始め、「之に代はるものは大資本と、スピードと映画のアメリカニズムだ。日本人の多くは、今やアメリカを通じてのみ世界を理解しやうとして居るのだ」。

このような銀座の変貌が白秋の「銀座の雨」と沙良峯夫の「銀座青年の歌」に表出していることになる。ただ皮肉なことに、この時代に白秋は詩、短歌、童謡などすべての分野における巨匠として全十八巻に及ぶ『白秋全集』（アルス）が刊行され始めたことに対し、沙良のほうはささやかな遺稿集を残し、近代詩人の一人としてのプロフィールは定かでなく、消えていったことになる。

その後沙良について判明したことを付記しておく。彼のプロフィールは「名誌の林」に掲載され、本名は梅沢孝一で、ペンネームはサラ・ベルナルからとつたものだとされる。遺稿集『華やかなる憂鬱—沙良峰雄詩集』は昭和四十二年に沙良峰雄をしのぶ会から刊行されている。

402 松崎天民『銀座』とゾラ、三上於菟吉訳『貴女の楽園』

松崎天民の『銀座』は安藤更生の昭和六年の『銀座細見』よりも先に出て、いずれも半世紀を経て中公文庫に収録されることになった銀座論、及び考現学の先駆けとも称すべき著作である。これは昭和二

年に小暮信二郎を発行者とする銀ぶらガイド社から刊行されている。なお文庫化に先立ち、新泉社から復刻されているので、ここではそれを使用する。

この元版の銀ぶらガイド社は出版社というよりも、巻末ふろくの形式になっている八十ページ近くの「銀ぶらガイド」という「買ひ物便覧」を編集発行していた銀座の広告代理店のようなどころではないかと推測される。『近代出版史探索Ⅱ』³²¹で、磯部甲陽堂と松崎の関係を記しておいたが、その長きにわたる新聞記者生活ゆえか、傍流出版社との関係が深かったように思える。

この「銀ぶらガイド」はカフエタイガーから始まり、大日本麦酒株式会社に至る、京橋を渡ってから新橋へと続く東西両側の銀座の店を軒並順に並べたものである。写真、ポスター、チラシ、広告、看板などを並べたそれらの店や会社だけでも二百以上に及び、松屋呉服店などのデパートの四枚の口絵写真を合わせると、当時の銀座の街並が浮かんでくるようだ。

このふろくは版元の企画で、著者としては無関係だと、松崎は「巻末小言」で述べているが、彼が七十五編の「今日の新しい銀座」論で伝えようとしている「新銀座の概念と輪廓」を浮かび上がらせ、具体的なイメージへと結びつかせる「水先案内の役目」を担っているといえよう。安藤の『銀座細見』とは異なる意味で、松崎の『銀座』はジャーナリストの眼から見られた銀座の話題が満載の一冊となっているわけだが、ここでは安藤の視点を補足する一編、松崎ならではの一編を取り上げてみる。

安藤は前回既述したように、第一次世界大戦を経てのアメリカ文化の台頭があり、それが銀座にも影響を与えていると記していた。彼はそのアメリカ文化と並ぶ勢力に、革命を成就したソビエトロシア文化を挙げているが、これは銀座に関係がないと処理していた。ところが『銀座』には「酒食大銀座」「口

シアのニーナ」や「露西亞の女「銀座に異国の花」」の章があり、「銀ぶらガイド」に見えるカフェーロシアの話が出てくる。この店は羊の洋画家として著名な辻永の兄弟である古美術商の辻衛が松坂屋の裏手で経営していて、うまい洋酒を提供するのが特色で、毛色の変った人々が入り出していたという。その場面を引いてみる。

「『私、ニーナ、ロシア、モスクワあります。あなた御酒……』などと、二十歳にしては老けて見えるロシア美人、ニーナの大きな姿を見るのも、カフェエマロシアの特色の一つと云つて宜からう。(中略)

ロシアに彼の騒ぎがあつた頃から、いろんな女が日本に流れてきて、カフェエに現れたり、芸妓になつたりして居た。此の東京でもロシア女を其処此処のカフェエに見たり、赤坂や神楽坂の待合に見ては、惻隱の情を起したものだつた、カフェエロシアのニーナも震災後に東京へ来て、今日までロシアの『異国の花』として、一顰一笑している一人であります。』

ソ連邦解体後の日本においても多くの東欧系女性が日本のバーなどで働いている光景を見ているが、ロシア革命からソ連邦成立後の日本でも同様だったのであり、松崎の言によれば、世が世ならロシア帝国の中流以上の令嬢として、幸福な家庭に暮し得たであろうニーナは、「大ロシアの近代悲劇を表徴した女」ということになる。

もうひとつのエピソードは、ジャーナリストとしての松崎の視線によつて捉えられた百貨店における万引で、それが「百貨店の窓「先ず万引きの話を」と「一日三万人「大百貨店の魅力」」において語られている。公式的には大百貨店における万引は一ヶ月に三、四件で、すべて警察にまかせているとされているが、松崎はその言について、「眉唾物」でその手には乗らないと断わり、次のように述べている。

「極度に購買欲を扇動して、これでもか、これでもかと、手を変へ品を換へて、肉薄してゐるのである。金の有無などには無頓着で、担当の紳士然たる男や、月経前後の夫人令嬢などが、ついソツと手を出すのも、無理からぬ話である。さながら女は何とやらで、呉服店や雑貨の前に立つと、恐ろしく興奮して、まるで別人のやうな眼顔になつてしまふ。道徳的な反省意識などは、何処かへ飛んでしまつて、遮二無二と所有欲ばかりが、恐ろしい力で台頭して来る。一挙手一投足の労で、何んな品物でも、黙つて持つて行けさうな易々たる構へが、遂に『女の万引』と云ふ、浅間しい場面を現出するのである。」

といつて松崎は具体的なデータを提出しているわけではないけれど、口絵写真の最初にある大正十四年に開店した松屋呉服店の中にあつて、八千坪に及ぶ店内の通路の広さに注目し、看視しやすく、万引の予防になつてゐるのではないかと考える。

この部分を読んで、私はただちにゾラの『ボヌール・デ・ダム百貨店』（伊藤桂子訳、論創社）における女性たちの万引の場面を思い浮かべた。そこではまさに松崎が書いてゐるやうな「夫人令嬢など」による万引が描かれてゐるのである。その場面にヒントを得ていたはずで、E・S・エイベルソンの『淑女が盗みにはしるとき』（椎名美智、吉田俊実訳、国文社）という研究書が出されるのはそれから一世紀を経てからだだが、松崎の視線はリアルタイムで百貨店での万引に注目してゐたことになる。

『ボヌール・デ・ダム百貨店』が三上於菟吉訳で『貴女の樂園』（天佑社）として刊行されたのは大正十一年であつたから、松崎はすでにそれを読んでゐたのではないだろうか。そのように考えると、『銀座』に充滿している彼のそうした視線に納得できるように思われる。

安藤更生の『銀座細見』に続いて、松崎天民の『銀座』も中公文庫版ではなく、戦前の原本を見てきたが、やはり同時代の昭和三年に出された片岡昇の『カメラ社会相』も取り上げてみたい。これも東京考現学の一冊と称すべきもので、三一書房の『近代庶民生活誌』（第七巻『生業』、昭和五十九年）に収録されているが、抄録であり、写真の大きさも異なり、原本を参照するにこしたことはないからだ。

『カメラ社会相』は梅原北明の文芸市場社から刊行され、装丁は酒井潔が担当し、革装の特製と並製があり、私の所持する一冊はもちろん後者で、奥付表記は三版となっている。文芸市場社の本を紹介するのは『近代出版史探索』28の和田信義『香具師奥義書』、同47の復刻版『我楽多文庫』に続き、三冊目とということになる。

著者の片岡は『時事新報』のカメラマンで、二十年近くこの仕事に携わり、「小序」にある言葉を借りれば、「私にはカメラと云ふ武器がある。パチリと撮つて、さてお話をと出ると大抵の人は柔らかな身の上ばなしを初める、これは全くカメラマンの役得」となる。そのようにして第一篇においては街頭に出て、九十数枚の写真を撮り、それらの様々な職業の人々にインタビュし、また第二、第三篇にあっては六十人ほどの名士、学者、名人、収集家を訪問し、近況などを問うている。それは自ずから、人物写真とペンによる「社会相」を浮かび上がらせる仕掛けになっている。

こうした仕掛けについて、長谷川如是閑が『カメラ社会相』に叙す「で、今日のような『その進化

と退化とに於て無常迅速である社会相」において、カメラマンの出現は現代の必然であると指摘し、次のように述べている。

「この意味に於てカメラ・マンこそは、決して嘘をつけない現代社会史家である。彼が嘘をつけないのである。(中略)

加ふるに君の社会史は、一方で嘘のつけないカメラを以てすると同時に、他方では、嘘もつける文字を以てするといふ両天秤で、所謂虚々実々の妙を極めてゐる。されば君の『カメラ社会相』一篇は、嘘のつけないカメラの結実を文字で補ひ、嘘をつける文字の欠点をカメラで補(中略)つて(中略)ゐるに相違ない。

で序文を書けとのことだが、序文はカメラで書く訳にも行かないので、文字で書くが、然し、文字でこそ書かれた此の序文には決して嘘のないことを保証する。」

『近代出版史探索Ⅱ』336や337でアルスの大正から昭和初期にかけての多彩な写真書にふれ、新しい「写真時代」の出現を意味するものだとその旨を既述しておいたが、如是閑の言葉もまた「嘘のつけないカメラ」による写真は「嘘をつけない現代社会史」を形成すると見なされるようになっていたジャーナリズム状況を伝えてゐる。

それは演出や編集を想定しないナイーブな写真をめぐる環境だったといつていい。如是閑と同様に、河東碧梧桐も「序文」にあたる「片岡君の『カメラ社会相』」において、世相は「人間の諸相」であり、そこに世の真実があるという意味のことを述べ、「片岡君は、カメラを通して世相を観ようとする」と書いている。ここにあるニュアンスも「嘘のつけないカメラ」といったもので、この延長線上に『カメ

- 池田輝方 243
池田年穂 606
池田宣政（南洋一郎） 133, 319-322, 325
池田文痴庵 164
池波正太郎 85, 94, 273, 296, 298
池部鈞 274, 276
井澤衣水 442
石井英之助 615
石井進 645
石井孝 645
石井忠 631
石井鶴三 240-43
石井友幸 667
石井柏亭 243
石岡久夫 406
石上良平 612
石川巖 65, 147
石川三四郎 521
石川治兵衛 445
石川淳 195-97
石川準十郎 457-58
石川すず 445
石川啄木 464-65
石川達三 177, 197, 221-23, 305
石川寅吉 78, 445
石川弘義 429, 497
石川湧 177
石川遼子 385-86, 388
石黒況齋 417
石子順造 134
石坂洋次郎 112, 253, 263
石崎文雅 383
石角春之助 21
石田憲治 449
石田忠平衡 128
石田幹之助 575
石堂清倫 591, 602, 624, 627
石橋臥波 529
石橋思案 164
石原莞爾 565
石原慎太郎 179
石原辰郎 667
石母田正 645, 647
石森延男 297
石渡磨須子 256
泉鏡花 25, 236, 506-07, 520
泉靖一 609
泉芳璟 147, 338
磯田光一 30
磯部節治 110
磯谷孝 561
伊丹青磁 223
市古貞次 71, 408
市島謙吉（春城） 17, 67, 79
市村瓊次郎 333
一色達夫 562
井筒俊彦 543, 545-46, 549, 551, 598
井出彰 636
出隆 109
伊藤愛山 365
伊藤永之介 195
伊藤喜朔 120
伊藤桂一 281
伊藤桂子 7, 117
伊藤堅逸 426
伊東深水 86, 136, 243, 486
伊藤晴雨 164
伊藤整 198, 223, 655-60, 662-64
伊藤敏子 578
伊藤俊治 12
伊藤長夫 645-47, 650, 655
伊藤博 639-40
伊藤博文 557
伊東正夫 220, 224
伊藤隆吉 589
稲垣史生 106, 256, 281, 307, 312
稲垣達郎 470
稲垣足穂 521
稲森佳夫 450
乾信一郎 250-53, 255, 260
犬養健 504
井上哲次郎 523-27, 530
井上留次郎 560
井上道人 612
井上通泰 529
井上靖 281-82, 550
井上友一 417
井上友一郎 205-10, 214, 227, 253, 260
伊能嘉矩 528
猪野謙二 511
猪俣津南雄 450, 452-53
伊波普猷 622
茨木憲 397
井原西鶴 72, 76, 136
井伏鱒二 169, 177
イブセン 491-93
イブラヒム（アブデュルレシト） 545, 549-53, 555-60, 564, 566, 574, 651
今泉雄作 527
伊馬鶴平 251

人 名 索 引

あ行

- アイスキュロス 498
 會津信吾 438, 443
 饗庭篁村 67
 青江舜二郎 63, 65
 青野季吉 18, 462, 464-65, 472, 626
 青柳信雄 120
 青柳瑞穂 41-2, 535
 青山二郎 177, 182, 200-04
 青山虎之助 212-14, 216-19
 青山倭文二 164
 赤木健介(赤羽壽) 612, 648-51, 666-67
 赤塚京次 639
 赤塚三郎 209-10
 赤松磐田 48, 66
 秋朱之介 41, 144, 195
 秋田雨雀 501, 539-41
 秋永芳郎 296
 秋山修道 231
 秋山憲兄 427, 429
 芥川龍之介 25-6, 76, 311, 521
 暁烏敏 338
 浅川謙次 596
 朝倉無声 11-12, 14-6
 浅野武男 251
 味岡伸太郎 577
 蘆川忠雄 365
 蘆田伊人 393-94
 東健太郎 631
- 麻生義 466
 麻生久 453
 足立巻一 82
 足立重 656
 渥美清 269
 渥美清太郎 503-04
 アドラー(アルフレッド) 457
 姉崎正治 338
 アーノルド(マシュー) 380
 阿武天風 442
 安部磯雄 456
 安倍浩 457-58
 阿部行藏 612
 阿部次郎 520
 阿部知二 253
 阿部泰夫 631
 安倍能成 62-3, 520, 530-32, 570
 阿部六郎 659
 尼崎晋之助 567
 天野為之 363
 天野藤男 417, 419
 天野元之 589
 網澤満昭 423
 鮎川秀三郎 655
 鮎川哲也 403
 鮎川信夫 396
 荒井献 540
 荒城季夫 154-56
 荒木田守武 78
 アラゴン(ルイ) 660
 荒畑寒村 415, 520
- 荒正人 303, 523
 有島武郎 520
 有田忠郎 540
 有富郁夫 514
 有馬頼義 161
 有本邦太郎 640
 有賀喜左衛門 575
 アルファサ(ミラ) 541-42
 安斎実 405
 安藤一郎 35
 安藤更生 1, 3-5, 8, 21
 安藤昌益 62-3
 アンドレーエフ(レオニド) 461
 飯島花月 165
 飯島徹 83
 飯田豊一 161, 168
 井狩春男 190
 井川洗屋 242-43
 生方敏郎 275, 560
 生島治郎 55
 生田葵 501
 生田葵山 442
 生田春月 183
 生田長江 452, 521
 生田蝶介 83-9, 118, 475, 484-89, 492-93
 生田花世 132
 井汲清治 659-60
 井家上隆幸 636
 池澤文雄 220
 池田一朗 231
 池田正式 78

小田 光雄（おだ・みつお）

1951年、静岡県生まれ。早稲田大学卒業。出版業に携わる。著書に『図書館道遥』（編書房）、『書店の近代』（平凡社）、『〈郊外〉の誕生と死』、『郊外の果てへの旅／混住社会論』、『出版社と書店はいかにして消えていくか』などの出版状況論三部作、インタビュー集「出版人に聞く」シリーズ、『出版状況クロニクル』Ⅰ～Ⅴ、『古本探究』Ⅰ～Ⅲ、『古雑誌探究』、『近代出版史探索』（いずれも論創社）。訳書に『エマ・ゴールドマン自伝』（ばる出版）、エミール・ゾラ「ルーゴン＝マッカール叢書」シリーズ（論創社）などがある。

『古本屋散策』（論創社）で第29回 Bunkamura ドウマゴ文学賞受賞。

ブログ【出版・読書メモランダム】<https://odamitsu.hatenablog.com/>に「出版状況クロニクル」を連載中。

近代出版史探索Ⅲ

2020年7月20日 初版第1刷印刷

2020年7月30日 初版第1刷発行

著 者 小田光雄

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232 web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

装幀／鳥井和昌

印刷・製本／中央精版印刷 組版／ロン企画

ISBN978-4-8460-1963-1 ©2020 Oda Mitsuo, printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。